

フロイトの「機知」論を読む

村井 翔

フロイトが『機知、その無意識との関係』（1905）なる奇妙な著作をなぜ書こうとしたのか、その経緯は明らかではないが、執筆の動機的一端は『夢の解釈』所収のいくつかの夢およびその分析について、当時の親友ヴィルヘルム・フリースから「あまりに機知的ではないか」と批判されたことにあるようだ。すなわち、フロイトは今度は機知そのもの（実際に分析されるのは、いわゆるユダヤ小話だが）について機知的でない、まっすぐな論理をもった分析を提示しようとしたのである。なぜなら、機知的という『夢の解釈』に対する評の背後には嘘つきユダヤ人（確かにここで扱われる小話の多くがユダヤ人にそうしたレッテルを貼っている）のいかがわしい書物といった含意が隠れており、それを察知したフロイトはフリースの批判を精神分析の科学的客観性に対する挑戦と受け取ったからだ。

ところが、機知の様々な表現形式の分析を進めるうちに、フロイトは自分が分析しているものが本当に機知なのかどうか分からないというアポリアに突き当たってしまう。機知特有の爆発的な笑いを結果として引き起こさなかったならば、それは機知ではなかったのだと言えるだけであって、笑いに先立って機知とは何であるかを決定することはできない。フロイトが見出した機知のメカニズムによれば、機知とは何らかの技法によって意識の注意をそらしている間に、無意識に等しい状態で心的エネルギーを一気に放出し、快感を作り出すことをめざすものである。機知の本性が意識的探究の手の及ばぬ、こうした瞬間的な笑いの爆発と切り離しえぬものだとすれば、研究者は後になってから、いったい何がおかしかったのかを遡及的に探り出すほかはない。

しかも、とりわけ「無意識との関係」が深い機知としてフロイトが重視する、1) 機知の語り手、2) 機知によって揶揄・攻撃される人物、3) 聞き手、という三項を備えた「傾向的な機知」（たとえば猥談など）においては笑うのは、つまりそれが機知かどうかを決定するのは語り手ではなく聞き手、第三者である。人は笑おうと思って笑うことはできない。だから、第三者のこの行為（笑い）はあらゆる意志の彼岸にあるし、笑いの瞬間、自分が何を笑っているのか決して分からないという意味では意識をも超えている。したがって、機知のステイタスを決定し、あわせて機知を語る自我のステイタスをも決定する、この気まぐれな第三者とは、実は中性三人称代名詞、エス（無意識）だと言わねばならない。

かくして、フロイトの『機知』論はアーリア的＝男性的＝論理的な「自我」を確立し、機知的でない『機知』論を書こうという著者の当初の意図をことごとく裏切って終わる。